

# 発見的，創造的学習について一考察

足利市立矢場川小学校教諭 飯塚 香

## 1 はじめに

現代社会における科学技術の進歩は著しく，現在の知識，技能は10年後にはもはや役立たぬものになることが予想される。このように現代社会の進歩に対処しうる能力とはいかなるものであろうか。

第一に求められるものは，知識の質の問題である。知識や情報の量的獲得を求めるのではなく，社会の変化にも耐え，転移力も備えた，基礎的で本質的な知識を身につけさせることである。ある事態に直面した時，散在する情報を目的にそって収集し，整理し，関係づけて問題を解決していく能力であり，態度である。つまり，情報処理の能力であり，問題解決の能力である。

すなわち，現代社会に対処し得る能力とは，豊富な知識や，その前提となるべき理解力や記憶力ではなく，情報を処理したり，これを自由に使いこなして問題を解決していく，創造的な能力なのである。

現在でもおこなわれている，現実の授業は教師中心の一斉授業が多いといってもかごんでない。そこで発見的，創造的学習を取り入れることにより，知識だけの授業から脱皮し，子どもが学習場面の中でみずから問題を握し，解決に必要な情報を吟味して仮説を立て，解決する。

創造的，発見的な能力が養われるのではないかと思い，この主題を設定した。

## 2 発見的，創造的学習について

### (1) ねらい

発見的学習は，主体的に学習を進める態度や問題を解決するという方法的側面も大切だが，何よりも学習内容を分析し，教材の本質をつきとめることによって成り立つのである。

1問題を解決して行く能力を身につけさせる。自分じたいの解決方法を思考を働かせ，仮説を立てこれを検証していく，生きて働く学力として学習者に定着するのである。

また課題をとらえ，解決し発見，あるいは解決できないが，学習の動機づけになる。創造性へ興味と関心を期待することができる。

### (2) 方法

発見学習は結果としての知識を教師が生徒に注入し記憶させるのではない。知識を獲得するプロセスを自からのものとして発見獲得させる。

したがって，子ども自身で明確に，問題のは握，仮説の設定，検証，一般化（発展），のプロセスをたどるのである。原理的な発見的思考過程を踏ませなければならない。

### (3) 学習過程

社会科教育の近代化においては，教材の精選という観点から基本的事項を設定することや，学年的に系統性を確立して行くことが必要とされている。

小学校新指導要領「社会」の特徴の一つは，社会科における基礎的能力の育成を重視したことである。すなわち，その「目標4」には，「社会生活を正しく理解するための基礎的資料を活用

する能力や社会事象を観察したりその意味について考える能力をのばし、正しい社会的判断力の基礎を養う」とある。

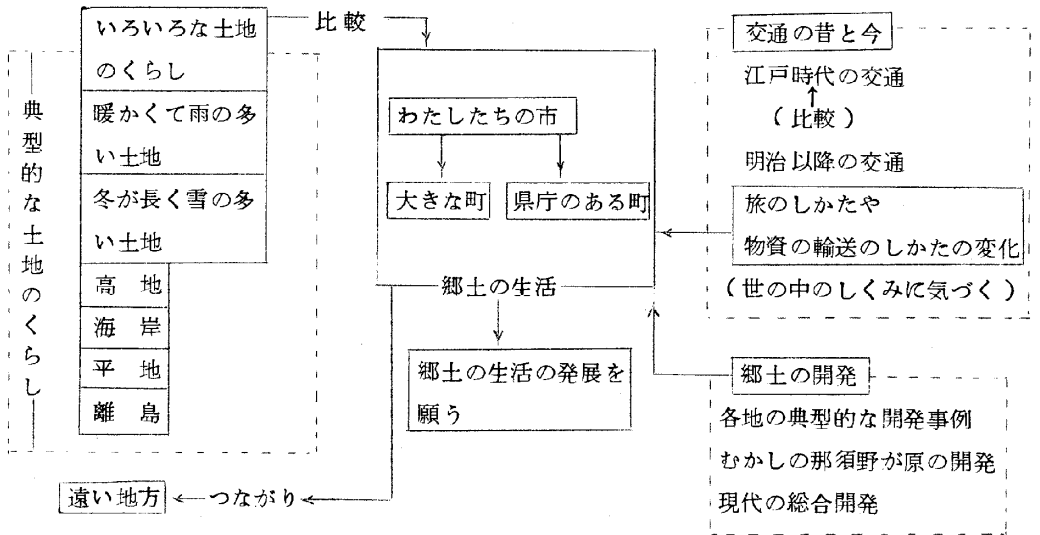
社会科の重要な学力として「基礎的能力」の育成、俗には「生きて働く力」の育成ということが、あらためてみなおされてきた。このような基礎的能力の育成は、いうまでもなく発見的、創造的学習によって育成される。このような能力は、その本性として積極性、自主性を前提としている。

社会科における発見的学習の指導過程は、その教材、素材の性格、教材、素材に対する児童生徒の実態、資料、教具等の学習条件の整備情况等によって、いろいろ異なったものになってくるのが実態であるが、一般的と思われる指導過程を考えると次のようになる。

- ①問題を握る段階 ②仮設、見通しをたてる段階 ③仮設、見通しを検証する段階  
④発見し、獲得した原理、法則等を適用し、発展させる段階
- ① 社会科学学習において、子どもの主体性、創造性をのばす等一步は、子どもが学習に対して積極的なかまえをもち、学習のねらい、課題を明確には握する。
  - ② この段階は、課題（問題）解決の方法や結果の予想、およびアイデアにとんだ学習のすすめかたを考える。発見的、創造的な能力の育成は、たんに既有経験や知識から予想、見通しをたてさせるだけでなく創意にとんだ解決の方法、手順を子どもたち自身に考えさせる。
  - ③ 自分でたてた仮設、見通しをあらゆる方法で自主的に解決してゆく、原理、法則を発見し発見のよろこび、成熟感を味わう。
  - ④ たんなるまとめでなく他の社会的な問題にまで適用、発展させる。

(二) 第4学年で扱う地域社会の内容

第3学年で学習した「のびゆく足利」4年では「郷土の生活」に拡大し、郷土を国内の他地域との比較学習や、交通の昔と今、郷土の開発といった歴史的背景について、いっそう明確には握させる。



「いろいろな土地」の学習にあたって、まず自分たちの地域の実態をふまえる。そこで静岡ではみかんがとれる。新潟では米がとれるこれをバラバラにおさえるのではなく、自分達の地域との比較のうえで、他地域との共通点や相違点が具体的に把握できるのである。

この場合、実生活とはいえないが、社会認識、世界認識の基底にたえず実生活あるいは学習主体と深くかわる地域現実をおき、そこから学習をはじめるのである。そうしたなかでまったく私的な営みと考えられている彼らの個別的な生活を、つねに社会関係のなかでとらえていく訓練をするのである。また自分たちの地域の分析の仕方を自分の目でたしかめ、自分で歩き、調査することのなかから学び、それでもっと他地域も分析的にとらえていく基礎をつくるのです。

㊦ 子どもの「創造」を妨げるもの

おとなにとってただの牛乳びんのふたでも子どもは、そのふたより色々想像していくのである。

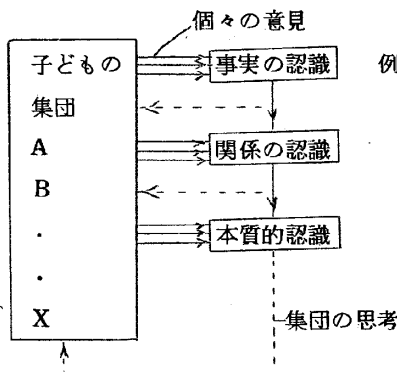
例 エンバン、ベタン、シュリケン、カチン、コイン

子どもは想像力は活発である。また好奇心もまた活発である。

以上のように規律どおりの強制された学習、進学のためのゆがめられた教科内容やその指導などによって、その芽は摘まれてしまうのである。環境が子どもたちの創造性をつちかう原動力になるのである。

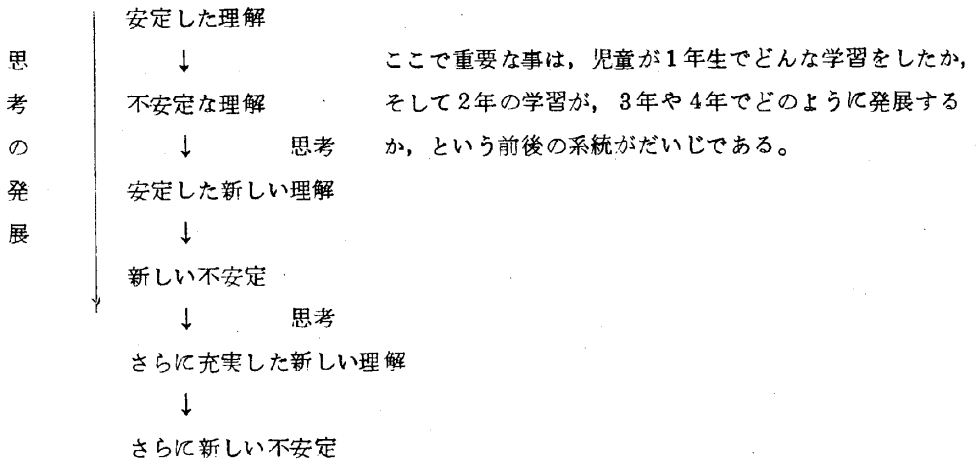
㊧ 社会認識の深まりと集団からの働きかけ

一般に社会認識が深められていく筋道は図(1)に示すようなことがいわれているが、集団の働きかける力は大きいものがある。社会認識を育てる社会科において、思考は学習の生命だというのが子どもひとりひとりの思考や、その基盤となっている個々の経験は、みな異なるものである。それが、集団の学習の場に提出され、集団で討議し思考することにより、個人の創造的な思考もいっそう確かになり、個々の具体的特殊な思考から一般的法則的高次の思考へと高まっていくのである。



例 教師がA児に質問、そのAが答えをすぐ受けてしまうのではなく、さらにB→Cに投げかける。ここで集団の思考が行なわれるのである。はじめて社会に対する認識が深められていく。

(b) 単元の系統的な位置づけ



3 指導の実際

例① 発見的、創造的学習2年

鉄道の仕事について学ぶ2年生の子どもが「切符に売り切れてないのかな」と発見

A児「豆腐も売り切れがあるから、売り切れる」予想

B児「切符の売り切れはない」……豆腐と同じでない。

そこで駅に行って調べる。調査結果売り切れがある事実を確認する。ますます駅の仕事についてつぎの段階に発展していった。

例② 4年（予想）

汽車や自動車のなかったむかしの旅で心配なこと（比較）

A児……早く行く事ができない（歩き）

B # ……大きな川があり、川止めなどありお金がかかる（TV、既習経験）

C # ……病気になる

D # ……山賊にあう

E # ……知らせができない（通信） ひきゃくの発展にあつかう

以上の予想を手がかりにその後の学習に既習経験の予想の整理検証していくのがむずかしい。

例③ 4年

作文（わたしの家は米ばかり作っていて麦や野菜は作っていません。野菜は買います）

この事実を知って、子どもたち「おかしい」という疑問を持つ。

仮説をたてる。……カードに記入

既習経験高知市附近の二期作を思い出す

話し合い、自分の予想を話し合う（創造）

雪が多くて裏作ができないという事におちついた。

資料として「雪の多い地方」「年間積雪量を示す地図」結果カードに記入する。

発表する。確認する。

雪が降らないのに裏作できない 原因について話し合う。(発見)

指導(田・畑)カードを出す(前のべた二回めのヒント)田が畑に変わらない事実

「柳川市附近」低地のくらしに発展していく(グループ予想)

上記の授業を検証して雪が降らないのに裏作ができないという、つまり「なんだろう」という事に気づき教師が「考えてごらん」など言わなくても「ふしぎ」と思わせる指導過程が必要である。

指導案について一言いうと目標にただ気づかせる、理解させる。もう一つ、何々について疑問をもつと銘記すべきである。だから大きな違いがあると思う。発見的、創造的学習では、概念が貧弱の時は、これを補説する情報を与えることが必要である。又、発問について大事なことは、低学年では、全員の子供が意識せざるを得ないような立場に追いこむふう。高学年では視点を変更させるに有効であるようにくふうすることができるようにする。

発見学習では学習者が問題意識をもち問題を自ら解決して学ぶべきである。ただ発見的創造的学習が成立するためには、一番はじめに述べたように、①問題は握する ②仮説、見通しをたてる ③仮説、見通しを検証する ④発見し、獲得した原理、法則等を適用し、発展させる段階である。

つまり子どもたちが課題を自ら解決でき疑問をもち発展学習につながれば発見的、創造的学習と言ってよいでしょう。

発見的、創造的学習を強調する理由は「考える」ことができる児童を育てるということに落ちつくのである。

## 評

「学校教育は学習する内容の多きを求めるのではなく、むしろ社会の基本的なことがらを考え、理解するために必要な基礎的能力の育成を心がけるべきである。……こうした能力はあくまでも各学年の社会科指導をとおして、確実に定着させ、深めていかなければならない」といわれているが、情報化時代といわれる現代にあっては、それにふさわしい学習方式が要求されるはずである。単なる知識の網羅的な記憶中心の学習が、かえって生き生きとしたこどもの思考力をうばうことは、多くの人々の指摘するところである。

さて、筆者がこの問題の克服を「発見的・創造的学習」に求め、基礎的能力育成にかかわる指導のあり方を明らかにしようとしたその積極的な姿勢に敬意を表したい。いうまでもなく、発見的学習は本質的な知識構造を学習内容として必要とするものであり、それを発見過程をとりながら習得する学習方法である。そのため、指導にあたっては、指導内容を精選するとともに、生きてはたらく能力育成に役立つようにそれらを構造的には握ることがたいせつである。この点、筆者の研究のねらいは的確である。今後の研究と発展を期待したい。